
月夜の幻想

花鶏美翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜の幻想

【Nコード】

N0091G

【作者名】

花鶏美翔

【あらすじ】

錬金術に恋にメイドに！？シンデレラストーリー長編！

メイドのお姫様

● メイドのお姫様 ●

このお話は一人の少女の恋物語です。

昔々、とても平和なアプレストワールドに、とても可愛い女の子がいました。

その女の子は、シャーリー・サクリードという名前でした。シャーリーには優しいお母さんがいましたが、シャーリーが一人でお買い物ができる年になる頃には、他界しておりました。

シャーリーの父は国でも有名な錬金術師でしたが、シャーリーが生まれてすぐに、旅に出ていってしまいました。行き先は、わかりませんでした。ですから、シャーリーは父の顔を知らずに育ったのでした。

一人ぼっちになってから、半年もすると従姉妹達が家に来ました。仲が悪かった、ルルド家の皆さんでした。

シャーリーの従姉妹は、姉のディランと、妹のベルナルドの二人でした。妹のベルナルドでさえ、シャーリーとの年の差は6歳ありました。

ディランも、ベルナルドもそれはそれは綺麗な女性でしたが、性格は童話にでてくる魔女よりも悪いのでした。

しかし、その二人とは比にならないくらいディラン達の母、つまりシャーリーの叔母は性格が悪かったのです。

傲慢で、勝ち気で、高飛車で……。短所はいくらでもありましたが、長所は一つありませんでした。

サクリード家は、あつという間にルルド家に支配されました。女王でもあるかのように、いつでも命令口調の叔母コルヴィン。そして、コルヴィンの命令に従う忠実な従姉妹ディラン、ベルナルド姉妹。

標的のシャーリーは三日でルルド家の下僕になったのでした。

シャーリーは可愛く、美人で、優しいうえに愛嬌のある子でした。

当然、近所の人たちにも人気で、国中の男性の虜と言っても過言ではありません。

女友達も大勢いて、誰にでも好かれるシャーリーでしたが、それをよく思わないのが約三名。

勿論、隣国からきたルルド家の皆さんです。

三人ともシャーリーに劣らず、いえ……それ以上の美貌の持ち主でしたが、前にも言ったように、性格の悪さも天下一品です。

周りの人からは、恐れられるようになりました。変な噂も生まれましました。

『ルルド家の三人は、悪魔と契約したんですって。』

『姉のディランは、人殺しなんですって。』

『妹のベルナルドは、実は合成獣キメラなんですって！』

『いやいや……。母のコルヴィンなんて一日で一つの国を滅ぼしたって話だぞ。』

皆、言い放題です。

根も葉もない噂話に、ルルド家の皆さんは一国を滅ぼさん程に怒り狂いましたが、その怒りの矛先をシャーリーに向けてストレス発散していたので、なんとか堪えていました。

そして、ある日。

怒りがMAXになったルルド家の皆さんは、シャーリーを屋根裏部屋に閉じこめ、家事全般を押しつけたのでした。

それまでシャーリーが住んでいた豪華で広い部屋は、ディラン達の

荷物置き場に。おそらく10万近くしたであろうドレスも売られて、
コルヴィンの遊ぶためのお金になり、シャーリーはとも今までお
嬢様をしていたとは思えない生活になってしまったのでした。
着ている服はボロボロのワンピース。色あせて、国の最下層の人た
ちでも決して着る事はないでしょう。

シャーリーは、自由に外に出ることは出来なくなりました。

シャーリーの事が好きだった男性達は、ひどく悲しみました。

シャーリーの友達も泣いていました。

『もう一緒に遊べないなんて……。』

『一緒に話すこともできないのね。』

『あの笑顔がもう一度みたい……。』

『ストーカーがもう出来ない。』

『電話ならできるかも。』

『一緒にお茶もできないのね！』

『ドレス……一緒に買おうって約束したのに……。』

中には、気持ち悪い願望もありますが、ルルド家の皆さんがシャー
リーおこなに行った腹いせは、皆に辛いものでした。

「ホッホッホッ、これでシャーリーは自由に外も歩けないわ。ご飯
も残り物しかあげないつもりだし……。」

「犬レベルね。……いえ、まだ血統書付きの犬の方が頭がよくて可
愛らしいわ。」

ディランとベルナルドが笑います。

「『いい気味。』」

コンコンコン。

屋根裏部屋の戸を叩く音がします。

朝日で読書をしていたシャーリーは屋根裏部屋の壊れそうな戸を開
きました。

戸の向こうにいたのは、ベルナルドでした。

「シャーリー。この服、全部洗っておいてね。」

そう言うと、ベルナルドは五個のカゴを床に置きました。どのかごも、服が今にも溢れそうです。

「わかりました。」

シャーリーはそう言ってカゴを受け取りました。

「シワーっ残さずキッチンと洗っておくのよ。」

ベルナルドが意地悪に笑いました。

「はい。」

シャーリーは依然とした態度で頷きました。

ベルナルドはその態度に少し驚きましたが、階段を下り、途中でふと足を止め、

「シワ、見つけたら許さないから。」

と言いつ残して下の部屋に消えてしまいました。

シャーリーは、すぐに洗濯に取りかかりました。すると、

「シャーリー。すべての部屋を掃除しておいてね。勿論庭の手入れも。……ああ、貴女の狭くて埃くさいこの部屋なら掃除しなくてもいいわよ。」

ディランが掃除道具を持たせました。

「すべて今日中に終わらせてね。」

ベルナルドのように意地悪に笑います。

シャーリーはまた依然とした態度で頷きました。

「靴磨き、お皿洗い、夕食の準備。」

素っ気なく言うのは、叔母のコルヴィンです。

シャーリーは洗濯物にアイロンをかけていたのですが、靴磨きは今やることなのだと気づき、手を止めました。

真っ黒なハイヒールをシャーリーはピカピカに磨き上げました。

「夕食、不味かったら許さないし、一つでも嫌いなものがあつたら作り直させるからね。」

コルヴィンは出かけていきました。

シャーリーはすべての仕事に取りかかり始めました。

メイドのお姫様（後書き）

少し長い話なのですが。

最後まで読んでいただければ光栄です。

基本ギャグですが、恋物語にも挑戦してみましたw

第二部

● ブロッサムばっちゃん●

その夜

全部の仕事を短時間でやりあげたにも関わらず、シャーリーは元気でした。

洗濯物には、シワを一つも残さず、家中ホコリーつ落とさず、夕食はレストラン並みの料理をそろえたので、コルヴィン達は文句の一つも言うことはできませんでした。

「シャーリー。」

夜遅く、ろうそくの光で読書をしていたシャーリーを呼ぶ声が聞こえました。

ここは、屋根裏部屋なのでシャーリー以外には誰もいない筈です。シャーリーが下に目をやると、壁に開いた小さな穴から年老いた（けど元気な）ネズミが覗いていました。

「初めまして。私はシャーリー・サクリード。」

「そんなこたあ、知つとるよ。だから名を呼んだんじゃないかい。」
ネズミは不機嫌そうに言いました。

ここで、ネズミが喋るということに、「ありえない」と片付けてはいけません。

この時代の素直で可愛い子供は、動物の言葉がわかるのです。逆に、素直じゃない子はわからないのです。ちなみに、二十歳までの人間しかわかりません。ややこしいですね。

「そ、そうだね。で、ネズミさん。私に何か用ですか？」

シャーリーはしゃがむと手をさしのべてネズミに言いました。

ネズミはシャーリーの手のひらに乗ると、

「いや…大した用はないんだがね。シャーリーは疲れないのかい…
…、と思つてね。」

「家事のこと、知ってるんだね。」

「壁から筒抜けなんだよ。あまりにもひどいじゃないか。」

シャーリーはネズミの問いに首を傾げました。

「そうかなあ……。うーん、疲れは感じないね、あまり。」

シャーリーは苦笑しました。

「何でだい？あんなにたくさんの仕事があつたのにかい？」

ネズミは不思議そうに尋ねました。シャーリーは、にこやかに微笑み返し、

「うん。そうだよ……。実はね、私、錬金術が使えるんだ。」

と、言いました。それが、当たり前のように。

「錬金術……。って、あれだろ？魔法みたいな……。」

「うん、私は魔法をみたことはないんだけどね。たぶん、そんな感じだよ。」

「でも、それがどうだっていうんだ？」

ネズミはさらに顔をしかめます。

「便利なんだ、錬金術師。時間の短縮は勿論だし、ミスも少なくなる。」

「そうだったのかい。」

シャーリーの言葉にネズミはようやく理解したようでした。

「ねえ、ネズミさん。」

シャーリーがそう呼ぶと、ネズミは不機嫌になりました。

「やめてくれ！ネズミさんなんて私を呼ぶのは！私には、“ブロッサム”と言う立派な名があるんだ。」

「あ、そっか。ごめんなさい。」

シャーリーが頭を下げました。

「わかればいいさ。これからはブロッサムと呼んでおくれ。ネズミはつけてもつけなくてもかまわないよ。」

「うん、わかったよ。“ブロッサムばっちゃん”」

シャーリーは笑顔で言いました。

その言葉に、ブロッサムは凍り付きます。

「ばっちゃん？どういうことだい？」

祖母さん呼ばわりが嫌なのか、人間の子供に言われたのに違和感に思ったかわかりませんが、ブロッサムは素っ頓狂な声を出しました。いつもより、半オクターブ高めでした。

「まあ、いい。好きに呼んでいいと言ったしね。……ところでシャーリー。お前、心は疲れてないのかい？」

突然の質問でした。ブロッサムも、言った後で自分自身にびっくりしたようでした。

「え……？心が？」

取り敢えず、ブロッサムは頷いておくことにしました。

「うん、大丈夫だよ。錬金術が助けてくれる。心配ありがとう、ブロッサムばっちゃん。」

“ブロッサムばっちゃん” 人間とネズミだが、とある形の絆ができたのは、事実でしょう。

第二部（後書き）

もう作品は完成しているので、続きをどんどん更新していきたいと思います。

スローペースですがどうぞおつきあいくださいw

パーティー

● パーティー（エルウッド視点）●

まだ朝の九時だが、オレ、エルウッドの機嫌は最悪だった。

清々しい空気に包まれ、空には青空が広がり太陽は赤々に燃える素敵な日だいうのに、アプレストワールドの一国の王子（次期王）は、それはもう不機嫌だった。（この文偉そうで嫌だな）
そして、それには3つの理由がある。

- 1・大佐（父であり王である変人アルフ）が城に仕えるメイドと楽しそうに話していたから。（朝からナンパはやめてほしい）
- 2・城下町で出会った生意気な少女にチビ呼ばわりされたから。
- 3・大佐がいきなり「お前のフィアンセを決めるぞ。」と言い、母・エリザベスも賛成したから。

「まったく……何だよ、一体！」

オレは髪をボリボリとかくと、ため息と一つついた。

オレの自慢の金髪が揺れる。

「母さん……大佐は!？」

後ろにいた母のエリザベスにオレは言った。顔は自然に引きつる。

大佐とは、王・アルフⅡハイラル・8世の事だ。アルフは、王なのだが……元は軍人の息子だったので、軍人としても働いている。こんな事は、この国始まって以来勿論前代未聞だ。

軍人として、アルフの地位は、大佐。もっとも、この国に戦争なんてもものはないから、大した仕事はないと言っていい。

憲兵や、面倒な雑務を下の地位の奴らに押しつけられる程度である。ちなみに、アルフⅡハイラル大佐は、オレの父親だ。認めたくはないが。

「町の視察よ。」

冷静な母さんの言葉。何で母さんは大佐と結婚したのか、いつも不思議に思う。

「一人で行かせたのか？」

「そうよ。」

即答だ。まあ、あの太宰の事だ。召使いを連れて町に出かけるなんて、似合わない。

「やめた方がいいんじゃない？ また女に囲まれペチャクチャと……。」

「いつもの事でしょう。」

これも即答だ。

「そうだな。」

相槌を打っておく。母さんは、心が広い。太宰はかなりの幸せ者だ。オレは大きくため息をついた。

「なあ、母さん。何で太宰はいきなりオレの婚約者を決めようなんて言い出したんだ？」

「私にはわからない。……それから、エルウッド。父親のことを、

“太宰”って呼ぶんじゃないやありません。」

「はいはい……。」

勿論、これからも親父を太宰って呼ぶつもりだ。

「じゃあ、質問変えるよ。なんで母さんはオレの婚約者を決めることに……太宰に賛成したんだ？」

オレは、真剣だ。母さんは、読んでいた本から目をあげて、オレを見据えた。

「貴男に……、エルウッドに幸せになつてほしいのよ。第一、王家は16歳までに婚約者を決めてないと……。」

母さんの言葉を遮るように、オレは手をかざす。そして、目で「もういいよ。」と訴えた。

母さんは、真面目にオレのことを考えてくれるんだ……。太宰は、面白半分だろう。

「どうせ、太宰はオレで遊びたいんだろう。メインは、国中の女と

のお喋りかな？」

皮肉を込めて意地悪く笑う。大佐のせいで、オレの性格は日々歪んでいく気がする。

「大佐のバカ」

これは、母さんに聞こえないように独り言。……大佐の思い通りにさせない！

パーティーまで後12時間……

パーティー（後書き）

短いけどシリーズ的多いパーティー編。

だいぶギャグ要素強めですが書いててめっちゃくちゃ楽しいです。

その2

● パーチー（アルフの素敵な朝）●

まだ朝の九時だが、一国の王、兼、アルフⅡハイラル・8世の上機嫌でした。

理由は3つありました。

1・朝から美人メイドと華やかな会話ができたから。

2・→の出来事にエリザベスが怒らなかった。（正しくは、趣味の射撃の的にならなくて済んだから）

3・エルウッドのフィアンセを決めるため、パーチーを開くから（パーチーに招待する国中の女の人と幸せなハーレムタイムをつくる予定）

「ああ、今日は何てよい日だ！太陽もこんなに煌めいているではないか！ハハハハハハハハハハ……！」

花束片手にスキップしながら満面笑顔で鼻歌まじりに歩くアルフは、実に幸せそうでした。

町ですれ違う人間で、誰がこの人をこの国の王だと気づくでしょう？きつと、誰一人としていないでしょう。

ただでさえ美形のアルフが、太陽の光を浴びて、百倍輝いて見えません。幻覚です。逆に、暑苦しく思えなくもありません。

「やあ、エヴァ。今日も美しいね。ロビン、君の透き通るような長い髪は、天気のお陰でさらに眩しく感じるよ！」

次々と出会う女性に声をかけてゆくアルフ。スキップも絶えません。「フハハハハハ！」

アルフの笑いは、空高くまで響きます。

パーティーまで後11時間45分……

● パーティー（ルノール視点）●

オレは城に仕える王子専用召使いだ。

詳しくいうと、王子の我が儘や、アルフ大佐の我が儘や、エリザベス皇后の命令に従う、有能な人間だ。

十五歳の王子と年は三歳しか変わらない。

昔から一緒にいたせいで、たまに幼なじみに勘違いされることがあるが、別にそんな関係ではない。

それに、王子はオレに恨みを持っている。

身長差が二十cmあることに。

しかし、それは王子が^{アイツ}チビなだけある。

オレに、何の罪があるというのだ。しかし、仲がいいのも事実である。まあ、オレがエリザベス皇后と仲がよいからなのだが。

ちなみに、オレのトレードマークは眼鏡である。よく王子に「ガリ勉の性悪人間みたいだぜ。ってか、その通りだけど？」と言われる。気に入らない。

エルウッドの方が、十分性格が悪いと思う。我が儘王子様だからな。

そして、今日。

アルフ大佐が、

「エルウッドの婚約者を決めるべくパーティーを開くぞ。」

なんて舞い上がっていた。

エルウッドに婚約者か……。

アルフ大佐は、おそらく女の人と楽しい一時を過ごしたいだけだろう。

エリザベス皇后が、このパーティーに賛成した理由がいまいちわからんな……。

何か楽しいアクシデントでも起こらないものかな……？

いや、自分で起こすべきか……。
今から下準備でもしておくか。

オレは、小さく微笑んだ。

パーティーまで後11時間……

その2（後書き）

パーチーシリーズ完。

短いですが、すぐ読み終わっちゃいますよね。

作者大好き眼鏡キャラの登場ですよ〜w

メイドの仕事その1

●準備はメイドの仕事です●

よく晴れた爽やかな日。

ルルド家は朝から、コルヴィン達が五月蠅いのでした。当社比20%。

いつもの騒がしさが倍増しています。

でも、シャーリーは全然気にしていませんでした。

「ホッホッホッ！」

デイランの高らかな笑い声が家中に響き渡ります。

そして、屋根裏部屋の扉が勢いよく開きました。

バン！扉を壊したいのでしょうか、デイランは……。

「デイ……デイラン姉様！？」

シャーリーはデイランの迫力に驚きます。

「な……何でしょうか？今からお昼の準備をしたほうがよろしいですか？」

来客でもあるのでしょうか。

「違うわ。……今日は、お城でパーティーがあるの。」

デイランが誇らしげに笑います。

“貴女は行かせてあげないよ”

口には出していませんが、デイランの表情をみればすぐにわかります。

「だから、靴磨き、馬車の中で食べるお菓子を作って！勿論、不味いと許さないからね。それから、ドレスとアクセサリーとメイク道具を全て揃えておいて。もう持っているのは飽きたから、新品にしてちょうだいね。派手で、パーティーで目立つやつを。」

「勿論、私とお母様の分もよ！」

ベルナルドが後から付け加えました。

「はい……。わかりました。」

シャーリーが頷きます。

……どうせ、私は連れて行ってくれないんだろうな……

シャーリーは心の中で呟きました。

「五時には出発するから、それまでに全てやっておくのよ！」
あざ笑うようにディランが言います。

「ちなみに、今日は帰らないから。」

「……ところでベルナルド。エルウッド王子のこと、狙ってみれば？ 貴女の顔なら十分だと思っわよ？」

ディランが話を変えました。

「え……！？」

ベルナルドが奇声をあげます。そして、苦薬でも飲んだかのように顔をしかめました。

「何でですの！？ コルヴィン姉様！ 私、あんな小さな人、たとえ王子であっても嫌ですわ！ だいたい、今日王子を振り向かせれば、結婚ですよ、結婚！ あんな人を夫にするなんて……。私、背の高い人が好みですから、嫌ですわ！」

身長のことを気にしているエルウッドがこの言葉を聞いていたら、ベルナルドは即死刑でしょう。

「あらまあ、ベルナルド。貴女の度胸には驚かされますわね。よく、一国の王子のことをチビ呼ばわり出来ますわね……。」

ディランが呆れたようにあざ笑いました。

「ですけど、コルヴィン姉様！ 本当の事ですわ！」

「……まあ、冗談はどうでもいいとして？ シャーリー？ さっき言ったこと、さっさと済ませてちょうだい。」

関係ない話を聞き流していたシャーリーは突然呼ばれて我に返りました。

「あ、はい！わかりました。今からとりかかります！」

その言葉の途中で、ディラン達は屋根裏部屋を出ていきました。ボタン……。

扉が閉まると共に、

「ハア……。」

シャーリーはため息をつきました。

「やろうかな。」

そう言つと粗末なベッドから立ち上がりました。そして、両手に複雑な模様の描かれた白い手袋をはめました。

パーティーまで後10時間50分……

メイドの仕事その1（後書き）

メイドシリーズ！

シンデレラにはなりたくないですね。ツライっす。

メイドの仕事その2

●準備はメイドの仕事（ベルナルド視点）●
今日の朝早く、私の家に一通の手紙が届いた。内容は、こう。

今日の夜九時から、王子エルウツドの婚約者を決めるためのパーティーを開きます。

是非とも（強制的ですが）我が国の女性の皆様には、城にお集まりいただけると光栄です（笑）

それでは、お待ちしております。

会場・城大ホール・ロザリアの間・ロザリオの間
アルフⅡハイラル・8世

どこが、（笑）なのだろう……。

半強制的に王子の婚約者決めパーティーに参加させられた。私も、母様も、姉様も、シャーリーも。

気に入らない。どうしてシャーリーまでパーティーに招待されるのだろう。

絶対に、シャーリーはパーティーに行かせてやらない！

私は別に結婚なんて興味なかった。王子は美形らしいけれど、身長は小さいらしい。

美形でも背が低くては、私は惚れない。

それよりも、私はお城のパーティーに出て、美味しいものをたくさん食べたかった。

……パーティーには何を着ていこう。

自分で用意するのも面倒くさいし、全てシャーリーに任せるか。
心の中で、独り言を繰り返す。

あ、今日紅きティンクトウラの発売日だ。

『紅きティンクトウラ』とは、私が前から欲しかったアクセサリーの事。

滅多に手に入れることのできない紅い綺麗な石を使用していて、値段は高い。

私が欲しいのは『紅きティンクトウラ』の『ドラゴン・リング』
ドラゴンを象った（かたどった）指輪なのだが、『紅きティンクトウラ』のシリーズで一番安い。

9800万円ほんたうです

母様が何とか買ってくれると約束してくれて、この間お店に予約したから取りに行けばいいだけだ。

母様は言っていた。お店が無料で『ドラゴン・リング』をくれるって。理由は教えてくれなかったけど。

アンサー
（A・お店の人がコルヴィンを恐れて、一円でも金をとれば、呪い殺されると思ったから。）

……今日のパーティーにしていこうかな？

私は、『ドラゴン・リング』を買いに行くために町中まちなかへと飛び出した。

まだ朝早いためか、外は少し冷えていた。私は、商店街をウロウロしていた。

「お店……どこだっけ？」

小さく呟く。

決して私は方向音痴というわけではない。ただ、指輪の予約をしたのは母様だ。

私は、店の居場所を知らない。

「無駄足じゃない！」

店の名前は知っている。

【ソリティア・アクセサリーショップ】

町の人に聞けば分かるかしら？

「おい、じいさん！」

「じいさん！？」

どこにでもいそうな若者が振り向く。それも、顔を引きつらせ。

「君、口には気をつけた方がいい。知らない人に“じいさん”なんて……。」

若者が振り返りながら叱る。

しかし、私を見た途端口を閉じる。顔色は悪く、白くなっている。

「ああ！？なんだよ、じいさん。文句ある？」

「（ルルド家次女、ベルナルド！別名、合成獣^{キメラ}の殺人者^{キラ}ベル！）」

若者は深く後悔する。ルルド家の娘を叱ってしまったことに。今日が人生最後の日であろう。

「あ……ありません、ベルナルドさん。いえ、ベルナルド様？」

「あらそう。ならいいけど……ところでじいさん。ソリティア・アクセサリーショップ知らない？」

私は笑顔で言った。人にものを尋ねるときは、笑顔が基本よね。

「お……、お城の近くにあったとか……。ここの商店街ではなく、城下町の中にある商店街です。ハイ。ベルナルド様。いえ、ベルナルド姫様？」

逃げ腰で言う男。膝がガクガクしている。

「そうなの。どうも。」

私はそう言い残して、ゆっくりと城下町の方へ歩み始める。

「道中お気をつけ下さいませ！ベルナルド姫様。いえ、ベルナルド女王様！？いや、もはやベルナルド皇帝！？」

若者が何か叫ぶが、私の耳には届かない。

ベルナルドが立ち去った後、若者はその場に座り込んでしまった。まるで、生気を失ったかのように気絶していた。

城下町にある商店街に来てみたものの、先ほどいた商店街とは比べものにならないくらい、やたら広い。私はしばらく歩いてみたが、ソリティア・アクセサリーショップは見つけることができなかった。商店街を通り過ぎ、城の手前にまでやってきた。店はなかった。

あのじいさん、嘘つきやがったな！！！

人気のない所に、一人の少年がいたので声をかけてみる。

「おい……。」

「ん？」

少年が振り向く。

「うわ、小さい……。」

私のこの一言を聞いて、少年は拳を固めて飛び込んでくる。しかも、

「誰がチビだ、誰が！貴様、死刑になりたいのか！？」

と、叫びながら。

初対面の人に何するのよ……このチビ！

私は少年の攻撃をサツとかわすと、

「ここに居ても時間の無駄ね。お店もみつからないし、そろそろ家に帰ろうかしら？」

と、あざ笑い、城下町の方へ方向を変える。

「サヨナラ、おチビさん！」

「待てえええ！女あああ！」

後ろで聞こえる声は無視しよう。私はそんなことを考えながら家へ帰っていった。

「おかえり、ベルナルド。」

姉様がシャーリーの入れた紅茶を飲んでいた。

「ドラゴン・リングは手に入れたの？ベルナルド？」

姉様が聞いてきた。

「ありませんでしたわ。店の場所を聞いても嘘つかれるし、その後も変で無礼な少年に出会いまして……。」

私は左右に首を振りながら言った。

「変で無礼な少年？」

「そうですね、チビな少年ですの。私が小さいって言ったら、目つきを変えて殴りかかってきましたの。私、怖かったですわ。」

「チビな……少年。それは大変でしたのね、ベルナルド。まったく、初対面の乙女に殴りかかってくるなんて、どこの無礼者かしら。母様に言いつけましょう！」

「それはどうでもいいですけど……。」

姉様に文句を言っすつきりした私は一息ついていた。

「ところで姉様。ドレスの準備はどうしますの？」

「ベルナルド、当たり前前の事を聞かないでくださいませんか？そんな面倒なものはシャーリーに押しつけるに決まっているじゃない。」

「そうですね。」

口元を歪めて笑う姉様。私も答えるように黒く微笑む。

「ホーツホツホツホツ！」

屋根裏部屋の扉を開く。姉様がいきおいよく開けたせいで、扉は不気味な音をたてている。もうすぐ、この扉は壊れるだろうな。

「デイ……デイルン姉様!？」

シャーリーは驚いて、腰を抜かしていた。

まあ、突然の事だし、仕方ないだろう。

「……何でしょうか？」

シャーリーに命令をしておく。今日もかなりの量の仕事を押しつける。

これを全てサラツとこなすのだから、余計憎らしくなっちゃう。

「……ところでベルナルド、エルウッド王子のこと、狙ってみれば？」

「はあ!？」

姉様だったら、一体何を言い出すのだろう……。

王宮での、優雅な時を過ごして一生を過ごすのも悪くない。でも、あんな小さな人は夫にしたいくない。

恋愛対象ではございません。

「……まあ、冗談はどうでもいいとして？シャーリー？さっき言ったこと、さつさと済ませてちょうだい。」

姉様が言うつと、シャーリーはさっそく仕事に取りかかった。

……これで自由な時間がしばらくある。

呪い人形でも作っていきましょうか？

パーティーまで後12時間……

メイドの仕事その2（後書き）

むかつくお姉さんですいません、
作者はこのキャラ嫌いです。笑。

お掃除

●お掃除しましょう●

パシュ！ピカ！ボン！シュウウ……パン！
パシュ！ピカ！ボン！シュウウ……パン！
パシュ！ピカ！ボン！シュウウ……パン！

部屋にはこの音が繰り返されています。

部屋には白い煙が立ちこめ、時々眩しい光が煙を通り抜けて、シャリーのシルエットを作り出しました。

「またやっているわ。」

部屋の様子を見ていたディランがため息をつきました。

「いいじゃないですか、姉様？どんな方法でも、召使いにはかわりないですわ。」

横にいたベルナルドが口元を歪めて笑います。

「そうね……。好きにやりなさい。」

ディランが薄気味悪く笑いました。

「ふう……。」

その頃、シャリーは一通りドレスをそろえ、地味なものは派手なものに錬成して、より派手なドレスへと変えていきました。

そして、ドレスを作り終わるとキッチンへと向かいました。

シャリーは、ディラン達のためにクッキーを作ることになりました。手先の器用なシャリーは一発で見た目も綺麗で美味しそうなクッキーを作ることができました。

しかし、分量を全体的に間違ひ、たくさん作ってしまったのです。

「どうしよう……。」

シャリーはいいコトを思いつきました。

ディラン達のもう一つラッピングすると、シャリーは満足そ

うに微笑みました。

シャーリーは、ブロッサムにクッキーをあげるつもりでした。

シャーリーは、初めてブロッサムと出会った日から、毎晩のようにブロッサムと話をしていたのでした。

今日は、日々の感謝もこめて、クッキーを食べてもらいたい……。

シャーリーは、強く思いました。

ボロボロのエプロンの今にも穴が開きそうなポケットにクッキーの袋をつめこむと、シャーリーは、次の仕事へと取りかかりました。

「えっと、クッキーとドレスの用意が終わって……。メイクの道具も分ければいいだけだから……。残りは掃除か。」

シャーリーが物置に行くと、普段あるはずの掃除道具が消えていました。

「きつと……。お姉様達が……。」

ここに来る間、焼却炉の近くにディラン達がいたのをシャーリーは思い出しました。

箒は今頃燃えて灰になっている事でしょう。

「仕方ない……。」

シャーリーは外に出て、太く、大きな木の棒を拾ってきました。

両手に手袋をはめ、模様が重なるように手を合わせて、箒に触れました。

パキパキパキパキ……

棒が音をたてながら箒の形へと姿を変えてゆきます。

ボン……！！

白い煙がたちこめ、爆発音が響くと棒は新品同様の箒になっていました。

「よし！成功！」

シャーリーは満足そうに笑いました。

「掃除を始めましょう!」

ザッザッ……テンポのよい音が暖かくなった部屋に響いています。

パーティーまで後7時間……

お掃除（後書き）

主人公、すごい技術持ってますよね。
流石ですw

ありがとう

● 感謝の気持ち ●

空には、月が昇っています。

「うつ……！」

屋根裏部屋に響くのは、シャーリーのすすり泣く声でした。

「今頃お姉様達は……。」

シャーリーはそう言っていると、派手なドレスを身にまとった姉達が騒いでいるところを想像しました。

「私も王子様に会いたいわ。」

独り言のように呟くシャーリー。

「元気をお出し。」

涙を浮かべたシャーリーに、ブロッサムは優しい言葉をかけました。

心配そうに顔を覗かせます。

「うん、大丈夫だよ。」

無理に笑うシャーリーですが、どこか悲しそうです。

「……。」

ブロッサムは言葉に詰まって黙ってしまいました。

「あ、そうだ。」

シャーリーは涙を拭くと、明るい声を出して笑顔を向けました。

「クッキーを焼いたの。内緒で多めに作ったから、ブロッサムばっちゃんも一緒に食べようよ。」

そして、ボロボロのエプロンのポケットから袋を取り出しました。

シャーリーが袋を開いて床に置きました。変わった形をしたクッキーが現れました。

ブロッサムはクッキーを砕いて欠片を手にとると、食べ始めました。
「美味しいよ、シャーリー。」

ブロッサムの言葉を聞いて、シャーリーの顔がパツと明るくなりま

した。

「有り難う、ブロッサムばっちゃん。」

「ところで、このクッキーは何の形なんだい？」

ブロッサムが尋ねると、シャーリーは、

「鍊成陣だよ。」

と即答しました。

そのクッキーは丸いともいえ、三角ともいえる妙な形だったのです。ブロッサムにとって、初めてみた形でした。

ポリポリポリ……

音と共にクッキーの形が消えていきます。

クッキーは高級な小麦粉と卵、牛乳を使用していました。バターの甘い香りが口の中に広がります。

どれくらいたつたでしょう。

お腹をパンパンにしたブロッサムとシャーリーがベットに寝っ転がっていました。

「有り難う、ブロッサムばっちゃん。」

「いや、こちらがお礼を言いたいよ。シャーリー。」

改まっているブロッサムに、シャーリーはどう反応していいか戸惑います。

「憎まれ口ばかりの私にも優しい言葉をかけて……それだけじゃない。毎晩のように私に面白い話を話してくれた。笑顔を向けてくれた。いつも一人だった私にや、嬉しくてたまらなかったよ。」

「ブロッサムばっちゃん……。」

ブロッサムの言葉にシャーリーは胸をしめつけられたような、心温まるような思いを感じました。

「それは……私も一緒だよ。私も気がつく一人で、ひたすら家事をやっていたし、家族にもヒドイ扱いを受けて、町の人と話すことさえ出来なくて……。ブロッサムばっちゃんには、いつも感謝している。心配かけてごめんね。」

苦笑しながらいうシャーリー。目元にたまった涙がキラリと光りました。

しばらく、静かな時間が続きました。

そして、ブロッサムが淡々と話し始めました。

「どうだい、シャーリー。私からのお礼を受け取ってはくれないかい？」

「お礼？」

シャーリーは「え？」と首をかしげました。

「ああ。私の知り合いでね、本の虫がいるんだ。」

「本の……虫？」

「私じゃ力になれない。でも、彼女にはそれなりの力がある。なら、私は彼女を呼んで、お前さんを幸せにできる……。」

「いいよ。そんなことしないで。」

シャーリーは首を左右に振りました。

「これ以上、ブロッサムばっちゃんに迷惑をかけたくないもの。」

「嫌だね。それじゃ、私の気がすまないよ！」

頑固なブロッサムには、シャーリーの言葉は無意味でした。

「大丈夫さ。時には人に迷惑をかけるくらいじゃなきゃ、楽しい時間なんて手に入らないんだ。」

「うーん……。じゃあ、まかせるよ。」

ゆつくりとシャーリーは頷きました。

そして、その瞬間。

「わあ……！」

部屋の中に光が溢れ、ボン！と爆発しました。

少しして煙が晴れると、そこには一人の少女が転がっていました。

「着地失敗……。って、アレ？ブロッサム師匠！？あ、こ、ここに、こんこん今晚和。」

かみすぎです。

パーティーまで後2時間25分……

ありがとう（後書き）

ようやく完成。ここ最近毎日更新できてうれしいですw
がんばって書くので読んでくださいね〜〜！

ドレスアップ

● ドレスアップ ●

「ダメね……。」

緊迫した空気が漂う中、色々な意味で恐いディランがシャーリーにダメだしをしました。そして、着ていたドレスを脱ぎました。

「そ、それではこちらのドレスは？」

シャーリーは別のドレスを手にして言いました。

「ダメね。」

着る前にディランは言いました。

その言葉を聞いたシャーリーは顔を曇らせました。

「もつと派手なのはないのかしら？」

ディランの言葉にシャーリーは一番派手なドレスを差し出しました。
「いいじゃない！」

ディランの瞳がキラキラと光ります。そしてそれは、派手なドレスを眺めているからではなく、ディランがこのドレスを気に入ったからでしょう。

しかし、そのドレスはキラキラよりもギラギラという音で表した方がぴったりの物でした。

「素敵……！」

うつとりするディランを、シャーリーは呆れ半分驚き半分という目で見ていました。

なぜなら、その派手なドレスはシャーリーが錬成に失敗してしまった物だからでした。

シャーリーは「この人の目はおかしいのではないか」と思いましたが、勿論胸の中にしまい込みました。

「それではディラン姉様。こちらがメイク道具です。」

「どうも。」

ディランはシャーリーからメイクボックスを奪うようにとると、く

るっ、と方向を変え、扉を強く閉めて部屋を出ていきました。

「いつ見てもディラン姉様は魔女みたい。」

一人になった部屋でシャーリーは呟きました。

今、シャーリーの頭の中では小さな頃に読んだおとぎばなしの中の魔女が可笑いしています。

「シャーリー！」

「……！？」

過去に戻っていたシャーリーを現実に戻したのはベルナルドでした。

「姉様がドレスを選び終えたって？」

「ハイ。」

シャーリーが頷きました。

「私のドレスは？」

明らかに上から目線でした。

「ど、どんなドレスがいいですか？」

店をジャックされた店員の様にシャーリーは口を動かしました。ベルナルドに怯えていました。

「そうね。毒々しいくらいの緑か血のように真っ赤なドレスがいいわね。」

悪趣味だ……！！

口には到底出せませんが、シャーリーは思いました。きっと誰でも思うでしょうが。

シャーリーは毒々しいくらいの緑色をしたドレスを探しました。しかし、そんな悪趣味なドレスなど、あるわけがありません。

「ない……。」

シャーリーは冷や汗を浮かべながら血のように真っ赤なドレスを懸命に探しました。しかし、そんなグロテクスなドレスなどあるわけがありません。

「な、ない……！？」

シャーリーは涙目でドレスを探します。

「ん？」

オロオロするシャーリーの目に止まったのは怪しいくらいに真っ黒なドレスでした。

「よし！いける……！？」

シャーリーは小さく拳を作りました。

「ベルナルド姉様……。すいません。毒々しい位に緑色をしたドレスと、血のように真っ赤なドレスはありませんでした。」

「なっ！？」

生意気！ベルナルドは舌打ちをして、シャーリーを睨みつけました。

「し、しかし……。怪しいくらいに真っ黒なドレスがありました。」

こちらでどうですか？」

シャーリーが恐る恐る言いました。

「何ですって！？」

そういうベルナルドの目は厳しくなっています。

「で、でも！美しい姉様ならきつと！」

シャーリーそう言いかけた時でした。

「素敵！！！」

ベルナルドは目を輝かせました。

「これこそ私にふさわしいわ！」

「そ、そうですね……。」

ベルナルドの言葉にシャーリーも頷く。

「これでいいわ。」

「では、こちらがメイク道具になります。」

ガン！

シャーリーが差し出したメイクボックスは、ベルナルドの手によつてはじき飛ばされ、中が飛び出しました。

「えっ……！？」

シャーリーがビクツと体を震わせました。

「こんなモノ使わないわ。捨てなさい」

「は、はい……。」

ベルナルドは形のゆがんだメイクボックスを手荒につかむと大きなゴミ箱に投げ入れました。

そして、不機嫌そうに部屋を出ていきました。

シンとした室内で、シャーリーはベルナルドがグチャグチャにしたドレスと壊れて、ゴミ箱に入りきれなかったメイク道具を片づけていました。

シャーリーの顔は曇っていました。手を動かすスピードもいつもより遅いようです。

「なんで私はこんな扱いをされなくてはいけないの？」

それは、初めて抱いた疑問でした。（気づくの遅いな。）

「私も……パーティーに行きたい……！」

そっと涙をかみしめながらシャーリーは言いました。

「……。」

シャーリーは居てもたつてもいられず、部屋を勢いよく飛び出していき、屋根裏部屋へ走っていきました。

その様子を見ていたディランが嬉しそうに微笑みます。

「そうよ、泣くのよ。泣かなければ、私たちが貴女にヒドイ仕打ちをする意味がないじゃない。」

走っていくシャーリーの背を見て、ディランは呟きました。

「いい気味。」

暗くなり始めた部屋の中、闇に吸い込まれるように聞こえました。

パーティーまで後4時間……

ドレスアップ（後書き）

ドSお姉様の登場ですw

Sの人の心はよくわかんないからな。書きにくかったですよ…。

魔法

●黒魔術師はドジっ子●

黒縁眼鏡をかけていて、茶色のショートヘアは爆発によってチリチリになっており、あまり似合っていない黒くて長いマントやワンピースはところどころ破れていました。

それはもう、みすばらしい姿でした。

「ブッロサムばっちゃんのお弟子さん？」

「的な存在かねえ。」

ブッロサムは、大きなため息を一つつきました。

ネズミと人間……いったい何の師弟関係だというのでしょうか。この人間は、どんなことをネズミに教えてもらうのでしょうか。

「きゃっ！」

シャーリーが小さな悲鳴をあげて、手で目を隠しました。

「どうした、シャーリー。」

「え……その、かかえている……本のイラストが……あまりにもグロテスクで。」

シャーリーが指さす先には、少女が抱えている分厚い本がありました。

その本の表紙は、生け贄のイラストがありました。闇の中に広がる血の海と、そこに沈んでゆく女の絵でした。女の苦しみの顔が痛々しくて、耐えられません。

「ご、ごめんなさいです。」

少女がペコペコ頭を下げて謝る。

「そんな本、持ち歩くんじゃないよ。悪趣味な。」

「ブロッサム師匠。ひどいですう。」

少女は泣き出しそんな顔をして、本を抱きました。

「これは私の愛読書なんです。」

「最悪だねえ。」

かわらないね、お前さんも。ブロッサムが目で言いました。

「シャーリー。この悪趣味なのが、私の弟子（らしきもの。正確には下僕かもしれない）だ。」

「はっ……初めまして。ニーチェ・アカシアですう。」

黒マントの少女——ニーチェは、緊張して汗ばんだ手を差し出しました。

シャーリーはその手を握り返すと、

「シャーリーです。よろしく。」

と笑いかけました。

「こいつは、黒魔術師なんだ。」

「黒魔術……。魔法使いさん!？」

「は、はい。」

魔法使いは本当にいるんだ……。と、シャーリーは呆然としています。

「え、あの。ブロッサム師匠。今日は何を理由に私を？」

「ああ。シャーリーに綺麗なドレスを仕立て、城のパーティーに行かせておやり。」

「なるほど。そういう事ですか。ま、まかせてください!きっと貴女をすてきな姫君にいたします。」

どこか頼りないと、シャーリーは感じましたが、口にはしませんでした。

「では、さっそくですが……。」

ニーチェが抱えていた分厚い本を開きました。

ニーチェは懐から一本の杖を取り出すと、宙で一振りしました。

そして、それを何回も繰り返していきました。

数分後、部屋は一変した風景になっていました。

「私の部屋じゃないみたい。」

シャーリーが驚いた顔で部屋を見回しました。部屋には、至る所に魔法陣が描かれ明かりはなく、真っ暗でした。

ニーチェが杖を振ると、蠟燭が現れ、オレンジ色の光を灯しました。暗闇で光る蠟燭は、少し不気味でしたが綺麗でした。

「じゃあ、始めますね。」

ニーチェはそう言うのと、部屋の真ん中に描かれた魔法陣にシャーリーを立たせました。

「（鍊成陣と似ているんだな）」

暗闇のせいであまり見えませんでした。シャーリーはそんなことを思いました。

ボン！という爆発が occurred しました。

ニーチェが持っている杖から、白い煙が出ていました。

部屋が、一瞬光ると、また暗闇の部屋に戻りました。煙が晴れて、部屋に明るさが取り戻されました。

「綺麗じゃないか、シャーリー。」

先程までボロボロの服を着ていたシャーリーは、見違えるほど美しくなっておりまして。灰で汚れて、真の美しさを隠されていたシャーリーの顔は、ほんのりとメイクされていて、ボサボサだった髪の毛も、今はウェーブがかかり、綺麗な金色をしていました。

薄い青色をしたドレスは、レースやフリルがたくさんついていました。生地がよいのか、着心地も最高でした。

胸元には、大きなダイヤモンドのネックレス。指には、ベルナルドが朝、町中を探し回った指輪がはめられています。

「成功です。シャーリーさん、満足していただけましたか？」

「信じられません……。勿論です！有り難うございます。」

最初は信じられない、という顔をしていたシャーリーでしたが、大きく頷いて、最高の笑顔をニーチェに向けました。

ニーチェは少し照れた顔で、

「お役に立てて嬉しいです。」

と微笑み返しました。

「でも……うらやましいですう。少し、その美しさを分けてもらいたいくらいですう。」

うつとりした目でニーチェが言いました。

「私も久々にお洒落しました。でも……」

シャーリーが言いにくそうに言葉をつまらせました。

「でも……靴がないんですが。」

「えっ!？」

途端、ニーチェの顔が青ざめました。

「成功してないじゃないか、馬鹿者。」

ブロッサムが呆れた声を出しました。

「すいませええええん!」

ニーチェの目から、滝のように涙が溢れ出しました。シャーリーにしがみつくと、ニーチェはひたすら謝りました。正直鬱陶しいとシャーリーは思いました。

「大丈夫……です。たぶん。」

せっかくのドレスが濡れないように、シャーリーはそつとニーチェを突き放しました。

「靴もだしておあげ。」

ブロッサムが言いました。しかし、ニーチェは顔を曇らされると、首を左右に振りました。

「どうしてだい？」

「私……もう力を使い果たしてしまつて……。靴を出すほどの魔力がないんです。だから、靴を出すことが出来ません。……てへっ。」
てへ、で誤魔化してしまいました。

絵に描いたようなドジっ子。そうでなければ、ニーチェ・アカシア

ではありません。

「あつ、でも……材料なら出せるかもしれません。」

「なら、さつさと出しておやりよ。」

冷やかな目でブロッサムが言いました。しかし、ニーチェはまったくその目に気がついていないようです。

「でも……材料だけでも駄目だよねえ。」

ブロッサムがニーチェを睨みました。

「大丈夫だよ、ブロッサムばっちゃん。材料さえ出してもらえば、自分で錬成するよ!」

シャーリーが頼もしい声で言いました。

「本当ですかあ……。」

荒く息を吐き出し、涙を無理に止めて、ニーチェが杖を握りました。「いきます!」

勢いよく杖を振り、ニーチェが呪文を唱えると、ボン!と何かが現れました。

煙が晴れると、そこには材木、アルミニウムの塊、太い縄がありました。

「これで……靴を作るの?」

シャーリーは、信じられないとでもいうように、ブロッサムに問いかけました。

ブロッサムはあまりの弟子の失態によるめいてしまいました。そして、何とか足で体を支えようと、

「この……馬鹿弟子いいいいいい!!」

と、怒鳴りました。ニーチェは体を縮めて、ブロッサムの説教を聞きました。

「すいませえええん!!!つか、もう力使い果たしてしまって、明日まで黒魔術使えません!!!!!」

またニーチェが泣き出しました。家中に響き渡るような大声でした。

「馬鹿者おおおお!!!!」

もう一度ブロッサムが叫びました。

何分かすると、ブロッサムも落ち着いてきたのか、ため息ばかりをこぼしました。

ニーチェは未だに涙を流して「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい」を繰り返していました。

「まあ……いいや。これでやってみるよ。」

半ば諦めたのか、シャーリーはため息をつくと手を合わせ、錬成陣を描き、呪文を唱えました。

そして、アルミニウムの塊に手を当てると、アルミニウムに何本もの光の線がはしり、少しずつ形を変えていきました。

「よし、完成。」

シャーリーは出来上がったモノを見て、満足そうに言いました。

「すごいですう……。すごいですう……。」

感激したらしいニーチェは拍手をしながら、ただその言葉だけを繰り返していました。

「少しだけ分解して、外見を綺麗な色にしてみたんだけど……。どうかな？ブロッサムばっちゃん。」

シャーリーの錬金術術によって作られた靴はアルミニウムが材料だとは思えない出来でした。

「いい出来じゃないかい。しかも、アルミニウムなら軽いから踊りやすいだろう。シャーリーの腕は、ニーチェよりも数段上だねえ。」

「……ね？ニーチェ。ちゃんと黒魔術の道、極めとけて、いっただろぅがああ！」

シャーリーはこの日初めてブロッサムの真の顔を見ました。（正直びっくり！）

ニーチェは目に涙を浮かべたものの、「ごめんなさあ〜い！」と軽く謝っただけでした。

「ブロッサムばっちゃん？……まあ、その辺にしておこうよ……？」

「私にこんな弟子がいるなんて、とんでもない恥だね！しばらく、私の元で修行だよ！」

「ええ……！？」

ブロッサムはだいぶ頭にきているようでした。ニーチェはがっくりと肩を落として、厚い本を抱きかかえました。

「でも……、アルミニウムの靴が。綺麗なものじゃないけど、私に似合っているかもしれないなあ。」

シャーリーがそっと呟きました。しかし、それはブロッサムの怒鳴り声にかき消されてしまいました。

パーティーまで後1時間……

魔法（後書き）

やっと10ですっっっ
w先は長いですがお付き合いくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0091g/>

月夜の幻想

2010年10月10日05時23分発行